

SPRING

No.95

日本大学 生産工学部 2010年8月4日発行

■学部長就任のあいさつ

魅力ある生産工学部らしさを紡ぎ出す

■巻頭SPECIAL 学部長バトンタッチ対談

前学部長 石井 進 × 新学部長 松井 勇

「長いようで短かった5年の任期」

「引き続くべきは持続させ、新たな試みも」

■学科ニュース

●平成21年度 学位取得者

■CIT イベントニュース

第33回鳥人間コンテスト出場

風力発電コンペ WINCOM 2010

新ロゴマーク決定のお知らせ

■CAMPUS NEWS

■連載 卒業生インタビュー

(株) 関電工 常務執行役員 安全・環境・品質本部長

志賀 裕さん

●新任教員紹介

●実務校舎の学科を超えた交流イベント

●平成22年度行事予定

魅力ある生産工学部らしさを紡ぎ出す。



日本大学生産工学部
学部長

松井 勇

本年4月1日より、石井進前学部長より引き継ぎ、生産工学部長に就任致しました。
どうかよろしくお願い申し上げます。

Contents

■新学部長就任のあいさつ	2
■特集 学部長ボタンタッチ対談	4
前学部長 石井 進 X 新学部長 松井 勇	
■学科ニュース	
機械工学科／電気電子工学科	8
土木工学科／建築工学科	9
応用分子化学科／マネジメント工学科	10
数理情報工学科／環境安全工学科	11
創生デザイン学科	12
■平成21年度学位取得者一覧	12
■ミモミのもと BikaBika 生産工	13
■CIT イベントニュース	
第33回鳥人間コンテスト出場	14
新ロゴマーク決定のお知らせ	14
風力発電コンペ WINCOM 2010	15
■CAMPUS NEWS	
新設「環境安全工学科」の1年を振り返って	16
自動車工学リサーチ・センター発足	17
■連載／卒業生インタビュー	18
■新任教員紹介	20
■実務校舎の学科を超えた交流イベント	22
■平成22年度行事予定	23



表紙：津田沼校 1号館

現在、大学を取り巻く環境は、極めて厳しい状況であります。少子化による大学全入時代を迎えるとともに、長引く経済不況は受験生の減少傾向と学業の継続を断念せざるを得ない学生の増加傾向に拍車をかけていると思われます。

このような中で、生産工学部は「魅力ある大学づくり」をさらに推進し、日本大学のスケールメリットや総合力を礎として「生産工学部らしさ」を創生する更なる改革を教職員一体となり協力し、適切に実践していく所存です。

石井前学部長が課題として挙げられた「教育力」「研究力」「就職力」「経営革新力」「財務力」の五つの力を縦糸に、「魅力ある大学づくり」・「生産工学部らしさ」を紡ぎ出す、更なる改革の四本の柱（「学生の目線に立った大学環境づくり」「特徴を持つ大学環境づくり」「開かれた大学環境づくり」「地域と連携した大学環境づくり」）を横糸にし、学部運営を進めていきたいと考えています。

－四本の柱－

第一の柱、「学生の目線に立った大学環境づくり」として、適切な教育メニューを用意し、学力の向上を図り、卒業する学生達の質を社会に保証できるように実践するとともに、教育、物づくりプロジェクト、自立、社会への順応及び経済面での「学生への支援」の更なる充実を目

指しております。特に本年度より「ピアサポートシステム」を実施し、教職員の助成を基に、上級生が1年生に学生生活全般にわたりサポートを行っています。また、キャンパス内で学生が行えるような仕事（キャンパスジョブ）を創出し、キャンパスでの体験を広げ、深めることを意図しております。

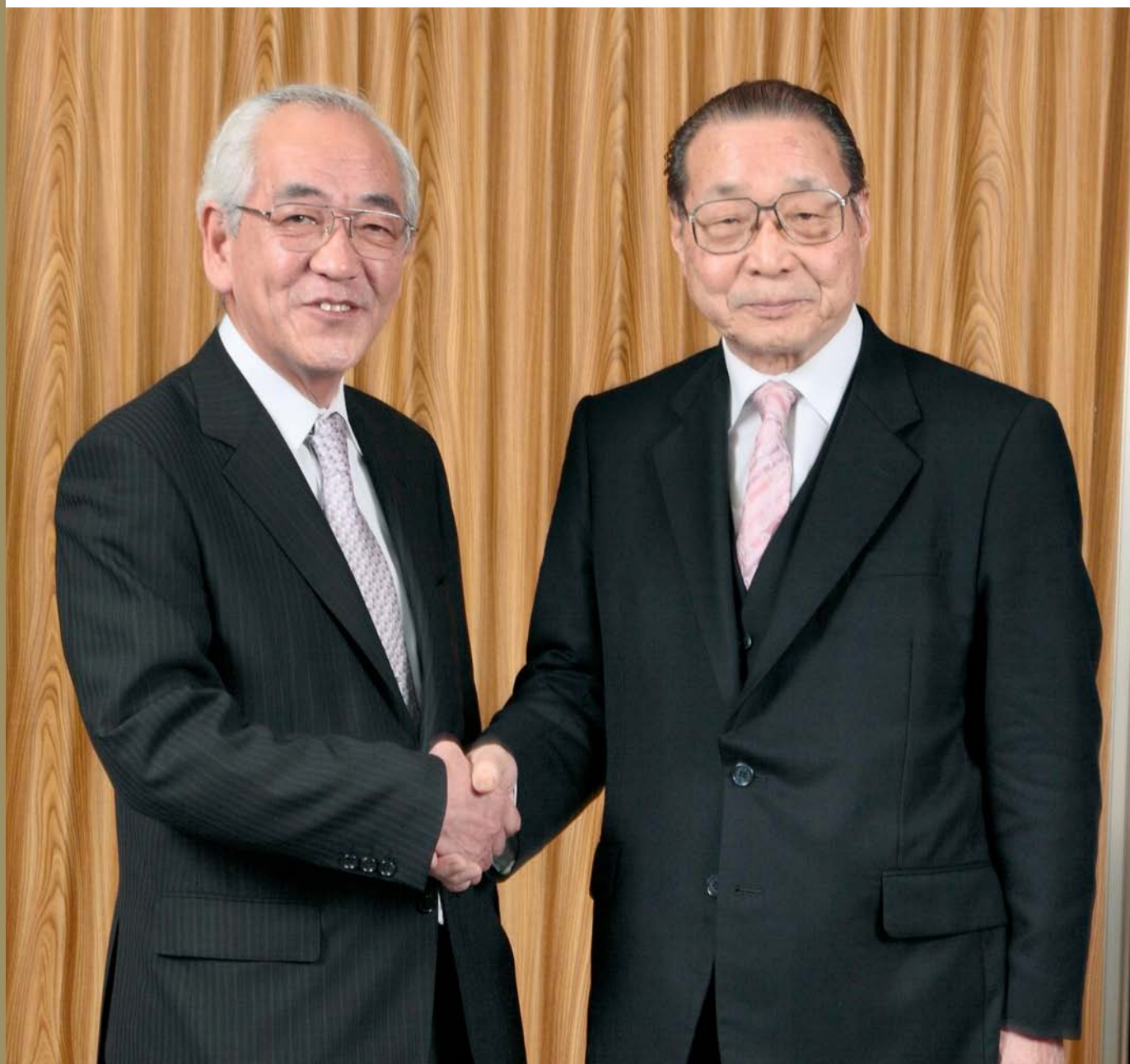
第二の柱、「特徴を持つ大学環境づくり」として、学科・コース、カリキュラムの特徴を明確化すると共に、横断的な学科・専攻間の共同研究・大学院教育の促進を行い、他大学に無いより質の高い内容を持たせる所存です。

第三の柱、「開かれた大学環境づくり」として、産官学連携共同研究の促進、生産工学科目の更なる充実、そしてサークル活動等の広報と顕彰を考えております。

第四の柱、「地域と連携した大学環境づくり」として、現在自治体と連携した「環境大学」の更なる拡充、地域居住者や高校生・大学生を対象とした行事の充実、新工房棟ギャラリー、図書館等のキャンパス開放を含めた地域居住者、大久保商店街との交流を更に深めることを考えています。

以上、魅力ある生産工学部らしさを紡ぎ出すために、更なるご理解とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

「長いようで短かった5年の任期」 「引き続くべきは持続させ、新たな試みも」



広く社会に求められる“骨太の学生を育てる”との思いから、学生一人ひとりと向き合い、学生の目線に立ち、さまざまな改革をはじめ指導や活動に積極的に取り組み、実践してこられた石井前学部長（現 日本大学常任監事）。このたび5年の任期を経て、4月に松井新学部長にバトンタッチされました。通り過ぎてみると意外と長いようで短かった…と語る石井常任監事、継続すべきところはしっかり継続し、新たな改革や活動を試みていく…と語る松井新学部長。今回はこのお二人によるスペシャル対談として、これまでそしてこれからの取り組み、魅力ある大学、魅力ある生産工学部の可能性など、熱き思いを語っていただきました。



他大学には無い特色を、どうすれば発揮できるかに注力。

松井新学部長（以下、松井）：このたびは長い間、学部長という重責を努めてこられまして、ほんとうにお疲れさまでございました。私も、これからその重責を石井先生をお手本に負けないよう務め上げなければならないと思っている次第です。

先生はこの5年間、どんな思いで取り組んでこられたのでしょうか。

石井常任監事（以下、石井）：まず思うのは、振り返ってみますとあっという間に時間が過ぎた感がありますね。

就任当時は5つのテーマを掲げ、学部発展のため頑張らねばと思っていました。1つは「高度情報化社会との向き合い」、2つ目は「少子高齢化との向き合い」、3つ目は「地域社会との向き合い」、4つ目は「地球温暖化対策との向き合い」、そして5番目が「学生一人ひとりと向き合う」。こうしたテーマに基づき、私なりに尽力してきたつもりで

す。

松井：先生が取り組まれてきましたこうした実績は生産工学部全体に浸透し、いま他大学には無い特色として表れていますね。

石井：高度情報化社会を迎え、「ものづくり」はより専門化さらに細分化されてきました。現在、製品を見ても、より軽量化・小型化、機能性といったことの要求が高まりを見せています。

つまり産業界においては、生産性の向上はもとよりいかに品質向上を目指した製品を開発、提供できるかが、大きなポイントになってきています。そのための技術力を持った人材、しかも安全性を含めて理解し、生産システムを構築できる管理技術能力を備えた人材が不可欠となっています。ですから、こうした人材の育成に力を注いできました。

アイデンティティーの確立が、次代の人材の輩出につながっていく。

松井：生産工学部は、わが国の基幹産業を支える工学領域を学ぶ学部。そ

の基礎となる教育力や研究力の向上に多大な貢献をなさってきたことは、私も教授時代から肌で感じておりました。

石井：また少子高齢化の時代ということ踏まえ、いかに魅力ある学部として受け入れてもらえるかを問題としてとらえ、学部体制の整備、充実化に励んできました。さらには地域社会と大学はどうかかわっていくか、つまりコミュニケーションをいかに図っていくかなど、大学として生産工学部としてのアイデンティティーの確立を目指してきたつもりです。

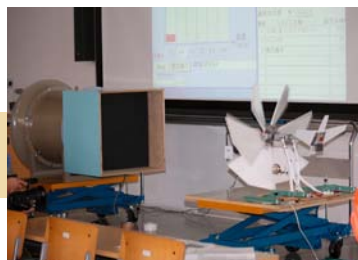
松井：明治時代以降、日本は“これからは工業立国だ！”と叫ばれ、各大学に工学部ができてきました。現在はどうかといえば“生産技術立国”と言えます。世界各国でその技術にしのぎを削っている現状を見ても、まさに生産技術創生の時代に突入したと言えるのではないのでしょうか。

日本大学に生産工学部が設立されたのは昭和27年。約60年前に設立されたわけで、日本はこれからは工学に

石井前学部長が力を注いだ さまざまなプロジェクト



鳥人間コンテスト



風力発電コンペ WINCOM



アカデミックアドバイザー室

加え生産工学が必ず必要とされてくるという予見があった。いうなれば“先見の明があった”ということですね。

石井：そうなんです。そうした先見性があったからこそ、社会の中で活躍している人材を数多く輩出できる現在の生産工学部があると言えますね。

活躍の舞台は世界中にあり、“ものづくりの楽しさ”を味わってほしい。

松井：石井先生はまた、昨年、新学科として「環境安全工学科」と「創生デザイン学科」を創設されました。そこには、どんなお考えや目的があったのでしょうか。

石井：いま地球の温暖化対策とともに、産業構造の変化や持続可能な社会への関心は、年々高まりを見せています。21世紀にふさわしい環境やものづくりは今後どうあるべきか、どうリードして

いくべきか。時代の要請ともいえるこうした問題に取り組み、よりパワーと能力を兼ね備えた人材の育成を目的に創設しました。

松井：環境保全と生活における安全性の追求、そして持続可能な社会の構築、生活する側に立ったものづくりは今後ますます重要なテーマになってくると私も切に感じています。

石井：両学科とも人気は上々で、将来の活躍の場が楽しみなんです。日本の中だけにとどまらず、世界が活躍の舞台なんですから。

松井：先生は、地域社会との交流といった面でも、公開講座や公開セミナーそして、市民環境大学や種々のイベントを通して、交流、連携を促進してこられました。学生とはどんなにかかわりをもって、交流を深めてこられたのでしょうか。

石井：大志を抱いて入ってきた学生が、目標に対し不安なく充実した大学生活を送れるよう、学習面での支援策の1つとして、気兼ねなく相談できる“アカデミックアドバイザー室”を開設するとともに、気軽にネイティブな英会話に親しめる“English Cafe”や“英会話連続講座”など、サポート体制の拡充、多彩な支援を図ることで学生一人ひとりとのかかわりを保ち、深めてきました。

松井：またさまざまなプロジェクトでも、先生は支援をされてきました。

石井：伝統になってきた「鳥人間コンテスト滑空部門」では、毎年好成績を収めており、学生自ら設計したフォーミュ



日本大学 生産工学部 前学部長
日本大学 常任監事
工学博士 石井 進



全日本学生フォーミュラカーレース大会

ラカーレース「全日本学生フォーミュラカーレース大会」に挑戦している「Cit-Racing Team」への支援など積極的に行っています。

また生産工学部では、デザインやアイデアに富んだ環境エネルギーの性能を競う「風力発電コンペ」を高校生から社会人まで幅広く参加を募り開催し“ものづくりの楽しさ”を体験してもらっています。

能力に磨きをかけ、各企業から“生産工学部の学生が、ぜひ欲しい”と。

松井：学生一人ひとりと向き合う教育は、私もとても大切なこととしてとらえております。そうすることで、学生の能力を引き出しやすくなるんですね。

興味あることや可能性、特長なりを、一度引き出すと学生自ら成長していくんです。火をつければ、おのずと燃え上がる、そうしたチョットしたことがポイントです。つまりハートに火をつける役目を担っているんだと思いますね。

石井：そうです。ですから日頃から学生に言っていることは、“専門以外で夢中になれるものを持て”と。1つだけでもいいんです、趣味の延長でもいい、とにかく夢中になれることが自分探しに通じるんです。

松井：以前、イギリスに滞在していた時のことですが、ある小学校では教科書がないんです。あるのは数冊のノートだけで、ある子はお絵描きノートに動物の絵がびっしり描いて厚くなって

る。けど算数のノートは薄いまま。その逆の子もいる。でもそれでいいんですね。

好きなことはドンドンやらせる。そうした個性を伸ばす動機付けがとても大切なんだと感じましたね。

石井：夢中になって打ち込めることが成長、発展には必要不可欠なことなんです。

松井先生は、私と違いしっかりした信念をお持ちですから、自信を持って新学部長としての責務を推進していただく。

松井：石井先生のこれまで培ってこられた大部分は、しっかりと継承してい

きたいと思っております。

今学生に対し思うのですが、卒論と
いうか卒業研究に意識を集中してもら
いたいと切に思っています。いわば最
終目標としての卒論、卒業研究ですが、
1年でまとめ上げる能力、発表するプ
レゼン能力といったことが必要とされ
ます。そうした能力に磨きをかけるこ
とで、各企業から“生産工学部の学生
が、ぜひ欲しい”となるんですね。

また時代のスピードはその速さを増
すばかりで、必要とされる学生の育成
を目指し私なりに次代を見据えた改革
なり、活動なりを実施していこうと思っ
ています。



日本大学 生産工学部 新学部長 工学博士 **松井 勇** (まついいさむ)

PROFILE

昭和 44 年理工学部卒。
大学院理工学研究科建設工学修了。
専門は建築材料学。
2006 年日本建築学会賞受賞。
東京都出身。65 歳。

機械工学科

フランス人女子学生が海外インターンシップ生として研修

フランス人女子学生 Morgane Tanguy さんが、2010 年 4 月から 3 カ月間 インターンシップ研修生として邊研究室で研究を行いました。Tanguy さんはフランスの IUT 大学レンス校材料科学工学科の 2 年生で、「グリーンコンポジットの成形法とその評価」について取り組みました。当研究室では 4 年前より毎年フランスからインターンシップ学生を受け入れてきましたが女子学生は初めてでした。実験や研究のみならず昼食時も邊研究室の学生と積極的に英語で会話するなど、研修成果とともに日本人との交流に関してもお互い実り多いインターンシップとなりました。



機械工学科女子学生と交流する Tanguy さん（下段中央）

飛行機パイロット免許取得支援プロジェクト

「憧れ」と「挑戦」がイメージされる「飛行機パイロット免許」の取得を支援する新しいプロジェクトが始まりました。学科の新しい特色を創出することを目的として、2009 年夏に邊吾一教授が米国のパイロット教習所数カ所を視察しました。視察結果を基に作成され、以下の特色をもつプロジェクト計画が学部で承認されました。

- 夏期休暇中の 2 カ月でパイロット免許が取得可能
- 免許を取得できた場合、日本で筆記試験に合格すれば、日本の免許が取得できる
- 専任教員が学生と一緒に教習プログラムを受講する
- 同行教員が渡米前に英会話を含み事前教育を担当する

2010 年 1 月の説明会を経て最終的に 6 人の学生から応募があり、募集初年度から実施することになりました。研修先は、米国ワシントン州シアトルの Wings Aloft 教習所（米国公認）で、2010 年 8 月から 2 カ月間パイロット免許取得に挑戦します。参加費用は約 200 万円（日本国内での教習費用の 1/3～1/4）で、地上講習費、60 時間の飛行訓練費、往復航空運賃、宿泊費などが含まれています。現在、同行教員の野村浩司教授による英会話や航空機力学などの事前教育を受講し、現地での研修に備えています。参加費用は安くはありませんが、費用に比例した貴重で有意義な研修を体験できるものと思います。

電気電子工学科

非破壊検査は、工業製品や構造物の傷を検出し健全性を評価して社会の安全と安心を維持する技術です。（社）日本非破壊検査協会は、非破壊検査法の調査と研究を行い、技術水準の向上普及を図り、もって学術文化の発展に寄与することを目的として 1952 年に設立されて以来、文部科学省所管の社団法人として非破壊検査法に関する科学の研究と調査、研究会および講演会の開催、非破壊検査技術者の認証などに関する事業を行ってきています。平成 22 年 3 月末現在の会員数は 3,955 名であり、当該協会が非破壊試験技術者として認証を行っている件数はおよそ 7 万名に及びます。

星川洋教授は、1967 年 4 月に日本大学生産工学部に勤務を始めると同時に、元生産工学部長の石橋泰雄先生に手ほ

星川 洋教授の（社）日本非破壊検査協会 協会賞受賞

どきを頂いて渦電流探傷の研究に着手し、以来 40 年以上に渡って日本非破壊検査協会において研究発表および当該協会の運営などの一端を担ってきました。そのご努力と功績により、平成 21 年 5 月の総会で（社）日本非破壊検査協会賞を受賞されました。

なお、当該協会の規則では、協会賞の表彰目的を次のように規定しています。

「わが国の非破壊検査に関する学問又は技術に特に顕著な功績があり、当協会の事業に多大な貢献した会員を表彰する。」

星川先生おめでとうございました。



土木工学科

土木工学科卒業生による「特別講義」の開催

平成 22 年 4 月 5 日に土木工学科卒業生による「特別講義」が開催されました。講師は昭和 51 年卒の株式会社 フジクラエンジニアリングの相澤善彦氏および昭和 53 年卒の東京都庁の村山公一氏の 2 名で、就職および公務員試験に対するアドバイスも併せてご講演いただきました。そして、7 月 7 日には、JR 東日本 久保木利明氏、鹿島建設 林亮介氏、静岡県庁 福田達樹氏による「特別講義」が開催されました。3 名の講師は平成 13 年の卒業生で、大学院生および学生 250 名を前に 2 時間の講演を行っていただきました。

卒業生による「特別講義」とあって、聴講は学生にとって各自のキャリアデザインおよび進路選択に参考となる貴重な講演となりました。講演後には、講師の方が各社のリクルーターとして個別面談

に応じていました。

今年度は、さらに数回の「特別講義」を計画しています。

生産実習に伴う現場研修旅行の実施

官公庁や民間企業、そして本学 OB 等のご協力により、毎年、生産実習現場研修旅行が実施されています。

本年度は、平成 22 年 9 月 14 日および 15 日の 2 日間、研修先は、東京湾臨海道路整備事業、首都圏外郭放水路事業、首都圏中央連絡自動車道、足尾砂防事業および湯西川ダム事業の 5 カ所、宿泊先は湯西川温泉です。



左から JR 東日本 久保木 利明 氏、鹿島建設 林 亮介 氏、静岡県庁 福田 達樹 氏

この旅行は、見学現場で知識を得ることはもとより、夏休み期間中に行われた、生産実習の各自の体験を話し合う場となり、学生同士のきずなを深める良い機会となっています

建築工学科

日本建築学会関東支部主催の第 11 回提案競技で、川岸研究室チームが優秀賞を受賞

川岸梅和 教授を代表とする川岸研究室チーム(北野幸樹 専任講師、生命工学・リサーチ・センター ポストドクター研究員 杉本弘文、博士前期課程 1 年 鈴木勝、博士前期課程 2 年 野田りさ)は、第 11 回提案競技「美しくまちをつくる、むらをつくる」〔テーマ:「住んでみたい 行ってみたい 江東区・東京湾岸のまちづくり」、主催:日本建築学会関東支部〕において、優秀賞を受賞しました。(平成 21 年 11 月 14 日)

「共に生きる・活きる暮らし」を作品タイトルとして、「人・活動・空間」「公・協・私」の相互浸透のデザインを基盤に生活空間と環境のデザイン、「参加と協同・協働」を基盤に「再生のデザイン」「誕生のデザイン」を創出し、「生活の知恵と科学技術の融合」から創生できるデザインを具現し提案しています。



応用分子化学科

6月28日、今年4月にミッションを終え帰還した米国のスペースシャトル・Discoveryの宇宙飛行士7人（山崎直子さんを含む）が米国大使館に訪れ、プレゼンテーションの後、参加者の日米大学生とディスカッションするという会「Meet and Greet with NASA Space Shuttle Discovery Crew for Japanese and American University Students」が開催されました。本学科からは、国



Meet and Greet with NASA Space Shuttle Discovery Crew for Japanese and American University Students に応用分子化学科から2名が参加しました。

際化学技術者コースの4年生、新井香子さんと小畑紅生さんが参加しました。

グループディスカッションにおいて、山崎直子（宇宙飛行士）さんのグループに入った新井さんは、「宇宙で植物は育てられるのか」と質問。山崎さんは「土で育てるのはまだ難しいが、水耕栽培ならできる」と答えました。また、小畑さんは、高校で地学や天文学を教える教師 Dorothy M. Metcalf-Lindenburger（宇宙飛行士）さんのグループに参加。「地球に帰還した後、最初に何をしたか」という質問に彼女は、「ペンを上から下に落下させて重力を確かめ、改めて重力を体で感じた。」と答えました。

本企画は、日本の大学生が科学技術分野でのキャリアを目指したり、アメリカとの共同技術開発への関心を深めて



もらうために企画されたイベントで、本部女性研究者支援推進ユニットを通して、参加学生推薦の依頼がありました。

この企画に参加した新井さんは「貴重な経験ができた。聞きたかったことが聞けてよかった」と話し、小畑さんは「スペースシャトル・Discovery 乗組員と対話するという貴重な経験ができたことをとても光栄に思う」と話していました。

マネジメント工学科

平成22年3月にマネジメント工学科4年の三浦和真君が情報処理学会創立50周年記念第72回全国大会にて、学生奨励賞を受賞しました。内容は、「データマイニングによる携帯音楽プレーヤーのブランド構築」という題目で、東京大学で行われた情報処理学会の学生セッションで発表されたものでした。

その研究は汎用的な手法であり、従来型のアンケート形式では無く、インターネット上の口コミやブログなど、さまざまな膨大な情報をプログラムで収集してデータマイニングを行う手法を提案したものでした。

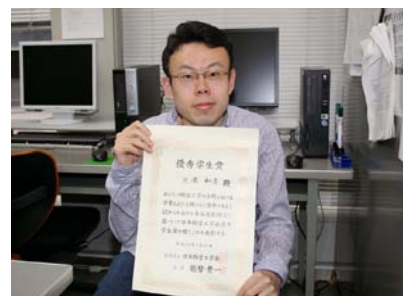
街角での企業アンケートでは商品が手元に無い状態ですし、批判や不満はなかなか答えにくいものです。しかし、特にブログや口コミでは、

三浦和真君 情報処理学会学生奨励賞と日本経営工学会優秀学生賞受賞

今の感情や心の本音が記載しやすいために、従来型の手法では得られない本当に問題点となる個所を見つけ出すことに有効です。またどんなタイプの人か、どのような商品を購入して、どのような点に評価をして、どのような点に不満を抱いているのかなど、データマイニングならではの解析結果が得られたことも興味深い点です。

もちろんプログラムだけでなく、学生に紙媒体でアンケートも行っており、手作業でデータをコンピュータに入力する作業も行ったが、その労力は非常に厳しいものがあり、同時に本手法の自動収集の有用性を証明する事が出来ました。

現在は大学院博士前期課程に進学して、学部時代と同じテーマで、テキストマイニングや、数量化理論、クラス



ター分析を活用した研究に取り組んでいます。学会にて発表を行う予定です。

三浦君は学部生入学から卒業するまで、常に成績がトップであり、その功績によって卒業時に日本経営工学会から優秀学生賞も受賞しました。このように学部生時代に2つの学会から2つの賞を受賞したことは、彼の功績を十分に証明するものであり、今後の活躍に期待します。

数理情報工学科

生産工学部の新入生は、4月に各学科で実施する1泊2日のオリエンテーションに参加します。数理情報工学科の約170名の新入生は、4月17日から群馬県のみなかみ町へ行ってきました。5台のバスに分乗して習志野を出発した時はみぞれ交じりの雪で、天候が心配でしたが、関越自動車道を北上するにつれて快晴となり、途中昼食で立ち寄ったドライブインでは一面の雪景色に歓声を上げました。メインイベントは、宿泊先へ到着後の体育館でのチームに分かれてグループ討議。メンバーのほとんどは初めて声をかける者同士であった他、先生と話しをするのも初めてという緊張の中、30分後には全員すっかり打ち解けた様子でした。そして、翌日は周辺を観光した後、

新入生の学外オリエンテーション。 群馬県みなかみ町に行ってきました！



たくさんの仲間ができました。

昼食は牧場でのジンギスカン、バスの号車毎に分かれて全員で集合写真を撮影し、帰路につきました。なお、数理情報工学科ではこのようなイベントをタイムリーにホームページ上で公開し、学生の皆さんが生き生きと大学生活を送っている様子を、今後も発信し続けてまいります。

数理情報工学科のホームページ：<http://www.su.cit.nihon-u.ac.jp>



グループ討議。

環境安全工学科

環境安全工学科はこの4月に二期生123名を迎え、総勢280余名となりました。

新一年生は入学後間もない4月17日（土）～18日（日）の1泊2日で茨城県大洗町にオリエンテーション旅行に行ってきました。この旅行は新入生が一日も早く大学に慣れ、また多くの学友をつくることを目的としています。

当日、首都圏では40年ぶりで観測史上3番目に遅い降雪があり、関係者一同ハラハラしていましたが、出発前のガイダンス中には天候もすっかり回復し、昼食後大型バス4台で宿泊先の大洗を目指しました。

ホテルでは教員1名に対し学生7名程度でグループミーティングを行い、これからの学生生活や学業からアルバイトや将来のことまで話し合い、自分だ

二期生を迎えて

けではなく、ほかの人も同じ悩みを抱えていることを知り、これからの大学生活に希望を持ったようです。

夕食後消灯までの自由時間には、1部屋5名程度の部屋割りですぐ顔合わせた仲間と語り合い、親交を深めていたようでした。

2日目午前中は大洗水族館にて、さまざまな海の生き物やアシカやイルカのショーなどを見学し、那珂湊で昼食後帰路につきました。1日目には不安な表情で会話も少な目であった学生も、2日目には明るく希望に満ちた表情で友達と話している光景が多く見られました。学生からは『旅行を通じて友達ができた』、『大学生活における不安が少なくなった』といった声が多く聞かれる有意義な旅行となりました。

環境安全工学科はスタート2年目



で、津田沼キャンパスにはまだ専用の学科棟がなく、また既存7学科とは異なり2年次まで実習キャンパスで過すため、津田沼キャンパスにおける存在感はまだ薄いものの、生産工学部の1学科として着実に成長しています。



創生デザイン学科

女性ファッション雑誌『JILLE（ジル）』のミニミニフォトブック コンテスト「テーマ：存在がおしゃれだと思える世界」（主催：双葉社『JILLE』編集部・カメラのキタムラ）において、創生デザイン学科2年生の仲村未央さんが特別賞を受賞しました（平成22年5月）「ブック全体から伝わってくる柔らかな光が不思議でおしゃれな世界観を醸し出す、やさしい気持ちにさせてくれる作品集」との選評。



『JILLE』×ミニミニフォトブック コンテストで仲村未央さんが特別賞を受賞



平成21年度学位取得者一覧

次の方々が平成21年度に博士の学位を取得されました。
今後のご活躍を期待しております。

課程修了によるもの

専攻	学位	氏名	論文題目	学位授与大学	授与年月日
建築工学専攻	博士（工学）	笠井 浩	石炭灰と頁岩微粉末を原料とした高強度人工軽量骨材を用いたコンクリートの諸性質に関する研究	日本大学	平成22年3月25日
応用分子化学専攻	博士（工学）	斎藤 仁	遺伝子組換えによる偏性嫌気性菌 Clostridium perfringens α -Toxin 抗原の同定法と高感度迅速診断法に関する研究	日本大学	平成22年3月25日

論文提出によるもの

専攻	学位	氏名	論文題目	学位授与大学	授与年月日
機械工学専攻	博士（工学）	野口 常夫	新垂直軸型風車用翼の開発・計測と風力発電への応用に関する研究	日本大学	平成22年3月25日
土木工学専攻	博士（工学）	岩下 圭之	Chl. a 数値化アルゴリズムを活用した閉鎖性海域における流入河川の影響評価に関する研究	日本大学	平成22年3月25日
建築工学専攻	博士（工学）	若竹 雅宏	地域集会施設における避難安全計画に関する研究	日本大学	平成22年3月25日
応用分子化学専攻	博士（工学）	田中 智	ソフトケミカル手法を用いた層間化合物の合成とその応用	日本大学	平成22年3月25日



もって BikaBika

生産工



あの手この手のサイバー犯罪にきをつけてネ! の巻 画: 岡野洋太



それっ
だめ!



数日後



『第33回 鳥人間コンテスト選手権大会』

滑空機部門に出場

開催日：7月24日（土）・25日（日）

開催場所：琵琶湖松原水泳場

大会実行委員会：読売テレビ

<http://www.ytv.co.jp/birdman/>

「学生ものづくりプロジェクト」として今年の日本テレビ『第33回 鳥人間コンテスト選手権大会 滑空機部門』に津田沼航空研究会が挑戦。

機体名は「零（ゼロ）」。2年前、風に流され失格になったことから、「ゼロからのスタート」ということで命名。安定性重視の機体で、4年前の準優勝記録 252.67 メートルの更新を目指す。



7月11日（日）に行われたテストフライトの様子

みんなの声援に乗って飛べ！



生産工の新しいロゴマークが決定しました。

A 案（決定ロゴ）



これからCIT
ロゴと併せて使
います。
よろしくね！



「セイサンって目に飛び込んでくると、一般の人達は何だ？ って思うだろう。ローマ字でSEISANとすればなおさらに注意を引くのではないか」石井進前学部長（現・日本大学常任監事）の発案によるご指示を、広報委員会が検討・審議し、候補案を石井前学部長と松井学部長へ提案。今回のA・Bの両案決定の運びとなりました。

経過は、A案からM案までの13案を何回か練り直し、両学部長が選考・決定しました。

掲載のA案が決定ロゴ、B案が適宜使用するロゴとして制定し、今後CITロゴと生産工学部では併せて使用していきます。ロゴは、現在商標登録申請中です。



B 案（適宜使用ロゴ）

第3回

風力発電コンペ
WINCOM 2010

10月31日(日)開催

日本大学生産工学部は、「ものづくり」の素養とデザイン・アイディアに富んだ環境エネルギー機器の性能を競う「第3回風力発電コンペ WINCOM 2010」を開催します。

このコンペは、高校生をはじめ、大学生・社会人のグループ、個人が独自の発想で風力発電機を作り、「ものづくり」の楽しさを味わうものです。皆さんのすばらしいアイディア、作品を募集しています。

自然エネルギーに興味ある学生諸君や市民の皆さんをはじめ、多くの方々の見学と声援を歓迎します。



主催：日本大学生産工学部

第3回風力発電コンペ WINCOM2010 事務局

協力：環境シンポジウム千葉会議実行委員会

後援：日本大学生産工学部校友会、日本風力エネルギー協会、
日本機械学会関東支部千葉ブロック、千葉県環境評議会、
千葉県総合教育センター

期日：平成22年10月31日(日)

会場：日本大学生産工学部 津田沼校舎

〒275-8575 千葉県習志野市泉町 1-2-1

TEL/FAX：047-474-2461

<http://www.cit.nihon-u.ac.jp/>

ご不明な点は、ご遠慮なくお問い合わせください。

■募集要項

参加申し込み開始日 7月15日(木)
参加申し込み締め切り日 9月15日(水) 午後5時
採否の回答 ※締切後1週間以内にメールにて連絡
装置概要提出締め切り日 10月18日(月)
装置の搬入日 10月30日(土) ※予備運転日
コンペ開催日 10月31日(日)

■応募資格

- (1) 高校生のグループまたは個人(指導教員の許可を必ず得て下さい)
- (2) 大学生・社会人のグループまたは個人(オープン参加)

■募集内容

- 競技は発電量とエネルギー利用の2部門で行い、出場は合計50チームまでとします。
 - 発電量部門は、高校生の風車受風部形状が水平軸型と垂直軸型の2型式で最大30チームと、オープン参加は受風部形状を問わず、最大10チームの出場者を募集します。
 - エネルギー利用部門は、高校生ならびオープン参加で、最大10チームの出場者を募集します。
 - 採択された参加者には製作資金などとして、高校生の発電量部門ならびエネルギー利用部門は1チーム2万円、オープン参加の発電量部門ならびエネルギー利用部門は1チーム1万円を提供します。
- 採択決定後、指定の口座に送金します。

■概要の提出

- 採択決定後、出場チームには風力発電装置の概要を提出して頂きます。
- 概要原稿見本とフォーマットをホームページよりダウンロードしてください。

<http://www.cit.nihon-u.ac.jp/wincom/index.html>

概要原稿は10月18日(月)までに事務局にメールまたは郵送にて提出して下さい。

■表彰

最優秀賞(30万円)1チーム、
優秀賞(10万円)3チーム、
他にデザイン賞、アイデア賞
の表彰をいたします。
尚、最優秀賞は高校生の発電
量部門のみとします。

詳細は

生産工学部ホームページ
をご覧ください。



—新設『環境安全工学科』の1年を振り返って— オリエンテーション・フレッシュマンセミナー・環境フィールドコンペ

環境安全工学科は昨年4月、一期生164名を受け入れてから1年が過ぎ、本年4月二期生123名を迎え、在学生280名余りとなった。昨年の一年を振り返ってみた。

平成21年4月3、4日、新入生学外オリエンテーションで南房総を訪れた。鴨川のホテルでのグループミーティングや、富津岬の地引き網体験などを通じ、友達ができ、大学への帰属意識が高まったといった意見が多く聞かれた。



新入生オリエンテーション（富津岬にて）

専門科目としては、1年次前期にフレッシュマンセミナーが必修科目としてあり、さまざまな専門領域を持つ環境安全工学科の教員の講義を聞く貴重な時間となっている。

また本学科は、環境、安全、エネルギーといった産業界と密接に関係する科目を主軸としているため、学外の講師による特別講義の機会を設けている。1回目はこのフレッシュマンセミナーの講義の最終日7月13日に、管清工業、管路管理総合研究所による特別講義を実習校舎にて行った。下水道施設の概略および管路内調査ロボットの概要説明後、調査ロボットを用い実習校舎の排水管内の内部検査を実施した。学生たちは使用中の排水管内の様子を見て、環境保全のための施設の重要性を理解した様子であった。

後期には津田沼校舎にて専門実技必修科目「環境実験Ⅰ」が設置されており、環境安全の基礎となる、基礎測定、

熱・電気測定、光・音測定、基礎環境分析の4テーマを、ラボ実験と実地試験とを組み合わせで行った。

特別講義2回目は環境実験Ⅰの一環として1月12日に東芝・原子力システム設計部安全設計担当者によって『原子力発電と安全』の演題で講演を行った。ここでは、柏崎原発と中越沖地震を例に原発の安全基準について技術基準とはどのようなものかを知り、一般社会と技術者との認識の違いを勉強した。

また、後期試験が終了した1月29日には、「環境実験Ⅰ」の総まとめとして、実習キャンパス全域を使用し「環境フィールドコンペ」を実施した。



環境フィールドコンペの様子

コンペには学生全員が参加し、実験で用いた機器等を使用してチーム毎に、騒音コンペ、風力コンペ、水質検査コンペ、メスアップタイムトライアルコンペの4種目を行い、各競技の順位によって総合優勝を決定した。各競技の審判は教員や大学院生が行い、「環境フィールドコンペ」はあたかもスポーツ大会のような様子であった。終了後に食堂にて軽食をとりながら表彰式が行われ、優勝チームには豪華賞品が副賞として渡された。本コンペは環境安全工学科の学生の絆を強めるイベントとして本年度も実施予定である。

本学科の1年はこのように、常に新しいことの連続であり、既存7学科に負けぬよう、伝統を築くことに邁進している。

■日本大学生産工学部自動車工学リサーチ・センター —モノづくりを極め、 人と環境に優しいミライのクルマを目指す—

2010年春、日本大学生産工学部に自動車工学リサーチ・センター（略称：NU-CAR）が発足いたしました。

日本大学生産工学部は、その名が示す通り、ものづくりに重点を置いた教育と研究に特徴があります。また、数理情報工学科をはじめとする3学科にはJABEE（日本技術者教育認定機構）に認定された教育プログラムが設けられており、国際水準レベルの技術者養成教育が行われております。更に、2009年度には創生デザイン学科と環境安全工学科が新設されたほか、数理情報工学科にはメディアデザインコースが新設される等、時代のニーズにあわせて変化する柔軟性と機動性を備えた学部です。このような生産工学部としての特色を生かし、人と環境に優しいクルマづくりを目指し、将来の自動車工学及び高度道路交通システム全般に関する社会ニーズにマッチした先進的研究の遂行と、学内外の人材育成及び社会貢献を設立理念としたリサーチ・センターがNU-CARです。

NU-CARには、機械工学科、電気電子工学科、建築工学科、数理情報工学科、環境安全工学科、創生デザイン学科及び教養・基礎科学系から28名（2010年6月現在）が在籍しています。また、他大学との共同研究の推進や講習会の実施等、他大学の先生方との連携を深めていきます。



景山教授（センター長）

NU-CARは、このような設立理念にご賛同いただいた企業等学外の関係者の皆さまから、賛助会員制度を利用したご支援により運営致しております。人と環境に優しいクルマづくりを目指し、自動車工学に関わる皆さま方のご理解とご支援をよろしくお願い申し上げます。

自動車工学リサーチ・センターのホームページ：
<http://www.nu-car.cit.nihon-u.ac.jp>



自動車工学リサーチ・センターのパンフレット



NU-CAR会議室で学生と討議をする古市教授（副センター長）

学生が中心のキャンパスを目指して、教職員はもちろんのこと、多くの人々がさまざまなかたちで学生をバックアップしている生産工学部。その中でも一段と心強いサポートをしてくださる卒業生の方々を紹介するのが、このコーナーです。今回は、(株)関電工 常務執行役員 安全・環境・品質本部長の志賀 裕さんにご登場いただきました。



名工は「大器晩成」。 愚直に努力し続けること以外に道はない。



株式会社関電工 常務執行役員 安全・環境・品質本部長 志賀 裕氏

少年時代、父の背中を見ながら「電気」への漠然とした憧れを抱いた

私は千葉市の生まれ育ちですが、私が子どものころは京葉コンビナートもまだ埋め立てが進んでいなくて、千葉火力発電所と川崎製鉄（現JFEスチール）ぐらいしかありませんでした。

父は東京電力に勤めてましたので、

台風になると父が家にいないんです。昔はよく停電もありましたし、父は何かあると電力を使っている人がダメージを受けないようにと懸命に働いていたわけですね。子ども心に、漠然とですが、父の「電気」という仕事に対してやり甲斐ある仕事だと感じていたんだと思います。

もちろん、ものづくりが好きで技術系に進んだわけですが、やはり父親の背中を見ながら電気に興味を持っていたから電気工学科に入ったんだと思いますね。

アポロ月面着陸、大阪万博、三島由紀夫事件、札幌オリンピック等々……。私の学生時代は高度成長ピークの時期

卒業生インタビュー ものづくりの世界

【PROFILE】

昭和25年生まれ。千葉県出身。昭和48年3月生産工学部電気工学科卒業。同年4月に関東電気工事株式会社（昭和59年9月に株式会社関東電工に社名変更）に入社。平成13年に九州支店長に就任以来、平成16年営業統括本部理事工事副本部長、平成18年執行役員山梨支店長などを歴任、平成20年には常務執行役員安全・環境・品質本部長に就任し現在に至る。



で、日本社会がダイナミックに動いていた時代でした。日本の国自体が将来のビジョンを明確に持っていましたから、学生一人ひとりも頑張るための目標を設定しやすい時代だったと思います。尾形研究室にいた私の卒業研究は絶縁材料（ポリプロピレン）の電気特性について。今思うと、この研究に没頭していた大学4年生のときが、人生の中で一番勉強をした時期でした。夏休み返上でしたからね。

安全に対する意識とその徹底を学んだ東京ディズニーランド

関東電工に入社したのは、この会社なら子どものときから抱いていた「電気」の仕事ができそうな気がしたから。入社以来、建築の電気設備工事を担当し、2001年に九州支店長になるまでずっと現場に出ていました。さまざまな物件を担当しましたが、忘れることができないのは30歳のときに担当した東京ディズニーランド。外国人技術者と一緒に仕事をしたわけですが、価値観の違いにとまどいました。とりわけ「安全」に対する意識と、その「徹底」の仕方には驚きました。

われわれは、小さいときから「外人のやることはいい加減で不器用」というイメージを抱いて育ちました。しかし、一緒に仕事をしてみるととんでもない。むしろ緻密で日本人のほうがついて行けない。もちろん外人すべてがということではなく、ウォルト・ディズニーがそういう会社だったということです。

安全対策も、東京ディズニーランドは随所にしつこいほど施されています。電気設備を例に挙げれば、日本の法規では、火災が起こったとき非常灯が

点いて床面で1ルクス、放電灯だったら2ルクスを確保すればいい。われわれはこういう発想でした。ところが向こうは、火災が起きたら照明は全部点ける。危ないときは明るいほうがいいじゃないか。ありったけ点ければ、それが一番安全だと。確かに、お客さまのためにはそのほうが間違いなくいいわけです。

安全に対するこういう意識は、非常に参考になりました。今、電気設備分野でも安全・環境・品質関係は社会的責任が問われる大きな問題です。直接生産にはかかりませんが、いずれも人の生命にかかわる部分です。そこを統括するのが現在の私の仕事ですが、当然、そこには若き日の東京ディズニーランドでの経験が生きています。

「やればできる」は「やらない人」の言葉。とにかくやり続けること

「技術」というのは「技」と「術」。「技」つまり、最初に人間ありきです。鉄にしても電子回路にしても、はじめにそれを手作業でできる職人、名工がいます。それを数値化して、普通の人でもできるようにするのが技術だと思っています。例えば鉋（かんな）を引く場合、何ミリ出して引いたらいいか。その数値を機械に移してコンピューター制御すると名工になるわけです。しかし名工は超えられない。ものづくりにはこういう側面があると思います。

また「大器晩成」とか、逆に「器用貧乏」という言葉がありますが、宮大工なんかの世界では、3年でうまくなる人は大成しないとされます。3年でできちゃった人と、10年かかってやっとできた人。どっちが名工となるかというと、10年かかった人だそうです。努



力の回数、度合いが格段に違うわけですね。

私も、若い人に言いたいのは、一生懸命やりなさい、ということ。基本的に不公平はないというのが私の持論です。テストで80点取っている人と90点取っている人では、90点取っている人のほうが勉強しているわけでしょう。フロックはないと思っていい。やっぱり愚直に他人より努力した人が勝つわけです。

また、「やればできる」という人は「やらない」人です。とにかく、他人より努力する。やり続けることが大切だと思いますね。

《取材後記》

取材途中、志賀さんが座右の銘について語ってくださった。『和して同ぜず』。これは志賀さんの人生における大きな出会いの1つ、通っていた高校の校長だった古賀米吉先生が好んで口にされていた言葉だとか。古賀先生は、まだ環境など顧みられない時代に「江戸川をきれいにする会」を結成、すでに環境問題に取り組んでおられたそうです。「この古賀先生に大きな影響を受けました」とおっしゃる志賀さんにとって、「環境」が現在の仕事の中で大きなウエートを占めているのも偶然ではないようです。

新任教員 紹介

新任教員のみなさん
よろしくお願いします！



電気電子工学科

2010年4月に電気電子工学科に着任いたしました。私は旧電気工学科の卒業生で、企業に7年間、労働省系短大に9年、高专に12年勤めました。縁がありまして、母校で教鞭を執ることができ、とても嬉しく思っております。専門はソフトコンピューティングという分野で、人間に近いメカニズムを持ったコンピュータについての研究です。私の経験したこと、これから学生の皆さんとともに経験することを通して、実体験としての工学を伝えたいと考えております。よろしくお願いいたします。



教授

原 一之
はら かずゆき

電気電子工学科

2010年4月より日本大学生産工学部電気電子工学科の助教として着任いたしました。それまでは放射線医学総合研究所、群馬大学重粒子線医学研究センターにおきまして、放射線の医学応用に関する研究開発を行って来ました。

さまざまな放射線を用いた治療や診断の高度化について取り組んでいきたいと思っております。教育と研究を通じて、自主的に楽しく学ぶことによって学生とともに成長していければと思っています。よろしくお願いいたします。



助教

坂間 誠
さかま まこと

土木工学科

平成22年度4月に本学土木工学科に准教授として着任しました。それまでは、金沢工業大学にて9年間勤務していました。教育と研究を通じて、学生の種々の能力を向上させるために努力を継続したいと考えています。

専門分野は海岸工学です。特に海岸侵食に支配的な海の波の碎ける現象と、海底砂の相互関係について研究を行っています。本学部の伝統を踏まえた人材育成と教育企画に、微力ながら貢献することができれば幸甚と考えています。



准教授

鷲見 浩一
すみ ひろかず

土木工学科

私は、これまで民間の建設コンサルタントとして、国や地方自治体の防災情報システムや河川・ダム・砂防情報設備を設計する一方で、防災・環境をキーワードとした地球観測衛星データの利用に関する研究に携わってきました。

本学では、リモートセンシングに関する研究を続けるとともに、民間企業で培った幅広い経験を生かし、社会が求める実践力のある人材育成に取り組むと考えています。よろしくお願いいたします。

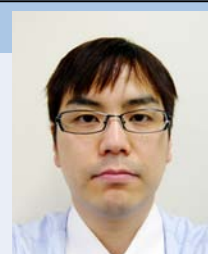


助教

青山 定敬
あおやま さだよし

建築工学科

専門は建築設備・建築環境工学ですが、もう少し具体的に紹介しますと、体温調節機能に障がいを持つ（汗をかけないなど）身体障がい者（脊髄損傷者、ハンセン病元患者、重度心身障がい児など）の温熱環境について研究を行っています。工学、医学、生理学などのさまざまな視点から踏み込んだ研究です。学生には、高齢者や障がい者が抱えている様々な問題を身近なものとして、関心を持ってもらいたいと思っています。どうぞ、よろしくお願いいたします。



助教

三上 功生
みかみ こうせい

応用分子化学科

平成20年8月に日本大学大学院総合科学研究科環境科学専攻を修了し、平成21年から本学生産工学部応用分子化学科に着任しました。現在、博士前期課程修了後の民間企業での勤務経験を活かし、マイクロ空間を利用した反応デバイスの開発とそのデバイスを使用した機能性無機材料の合成に関する研究を行っています。今後は、民間企業での勤務経験等を学生に伝えることで広い視野を持って物事に取組める人間になってもらえるよう教育・研究に取り組んでいきたいと考えています。



助教

佐藤 敏幸
さとう としゆき

応用分子化学科

平成 17 年 3 月に同志社大学大学院にて学位を取得したのち、平成 22 年 3 月まで東北大学に勤務し、高温高圧下における水素結合性流体を溶媒とする溶液物性に関する研究に携わっていました。化学における「ものづくり」の場は流体中であり、その物理化学的性質を知ることは、「ものづくり」にとって適切な系を選ぶための基礎的知見を獲得する手段となります。能動的で意欲あふれる学生とともに日々研鑽を積む所存です。よろしくお願いいたします。



助教
保科 貴亮
ほしな たかあき

環境安全工学科

日本大学生産工学部工業化学科を卒業、博士前期課程を修了しました。その後、副手・助手を経て、本年度から専任講師に着任しました。専門は生物化学で、抗原抗体反応を利用した血中微量成分の定量や微生物検出に関する研究、また微生物を用いたバイオマスの生産に関する研究を行っています。

環境安全工学という新しい学問領域において自分の専門が活かせるよう精励いたします。よろしくお願いいたします。



専任講師
小森谷 友絵
こもりや ともえ

創生デザイン学科

造形・美術の分野に籍を置き展覧会を中心に活動しています。

描く、造形する面白さ、途中過程における造形要素の様々な変化する姿（形、色、表情、動き、素材）からの発見、思考（イメージ）の展開。このプロセスの面白さ、触れることにより次々と展開していくストーリーを楽しんでいます。

触れる、まず感じてみよう。そこからイメージが展開していく。この造形の面白さを伝えることができればと思っています。



教授
二井 進
にい すずむ

創生デザイン学科

平成 21 年 4 月に本学創生デザイン学科の助手に就任し、本年 4 月より助教としてデザイン材料学やデザイン製図演習などを担当しています。専門は材料学および材料加工学です。

新学科においてこれまでの経験を活かし、皆さんがデザインしたモノを実現するため、テクノロジー分野の教育および研究をしていきたいと思っています。よろしくお願いいたします。



助教
中川 一人
なかがわ かずと

創生デザイン学科

コンサルタント会社、ポストドクター研究員を経て、平成 21 年 4 月、創生デザイン学科の誕生とともに助手に就任し、本年 4 月より助教として「デザイン製図演習Ⅳ」や「地理情報システム科学及び演習」を担当しています。専門は地域計画、地理情報科学ですが、新学科ですので、新しい研究分野の開拓にも果敢に取り組んでいきたいと思っています。



助教
中澤 公伯
なかざわ きみのり

教養・基礎科学系

平成 21 年 4 月に教養・基礎科学系の助手として着任し、本年 4 月からは助教として化学・生物実験並びに基礎化学演習などの講義を担当しております。私は博士前期課程までを生産工学部で過ごし、その後本学薬学部で博士号を取得しました。専門は分析化学であり、主に生体内のタンパク質の高感度分析法などの開発に取り組んでいます。学生の皆さんにはサイエンスの楽しさと可能性を懸命に伝えていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



助教
朝本 紘充
あさもと ひろみち

教養・基礎科学系

私の専門は科学哲学です。学部と修士の時は原子核工学を専攻していました。このときは量子力学を道具として使うだけでしたが、徐々に量子力学における実在や因果といった概念的問題が気になり始め、科学哲学の勉強を始めました。

生産工学部では「自然と科学」などの授業を担当します。これまでの研究を生かして、科学における哲学的問題を考える楽しさを伝えることができたかと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。



助教
北島 雄一郎
きたじま ゆういちろう

実籾校舎（教養・基礎科学系）の学科を超えた交流イベント——前期の報告

1年生が中心となる実籾校舎では、学科を超えて交流を図れるよう、年間を通してさまざまなイベントを組んでいます。今回は、前期に行われたイベントの様子を見てください。募集人数はイベントにより異なりますが、それぞれ盛り上がりました。すべて参加費無料です。

第一回目のビンゴ大会は、まだ誰も顔見知りのいないガイダンス期間中に行われました。大変な盛況で、ここで一気に仲間意識が生まれた人もいることでしょう。

5月に行われた千葉ロッテマリーンズ公式戦観戦ツアー。日大野球部が実籾校舎を練習場に行っていることと、千葉ロッテマリーンズが幕張をホームとしていることで、生産工学部と野球は縁が深いのです。



ボウリング大会も参加者多数！

6月の仲間が出来た頃に行われたので、友達と誘い合っただけの参加も多かったようです。



生産工学部らしいイベントとして、「紙飛行機競技会」が**7月**行われました。流体力学を実感できたでしょうか？



後期にも、9月・国体観戦（水泳）、10月・「筑波宇宙センター施設見学会」、11月「東京歴史的建造物見学会—皇居・旧江戸城見学会」、「演劇鑑賞会」、12月・「クリスマス・イルミネーション点灯式」とイベント目白押しです。

申し込み方法は、それぞれのイベントについて日程が近づいてからポスターが掲示されます。掲示物に注意して参加しましょう。後期からでも間に合います。

平成22年度行事予定（後期抜粋）

行 事	2～4年次：津田沼校舎	1年次：実籾校舎	大学院	備 考
オープンキャンパスⅣ	9月5日（日）			
A O 入 学 試 験	9月18日（土）・9月19日（日）			
後 期 ガ イ ダ ン ス	9月22日（水）※応用分子化学科1・2年のみ9/21（火）・9/22（水）		9月22日（水）	
後 期 授 業 開 始	9月24日（金）※10/2（土）、10/9（土）は月曜授業を実施、10/27（土）は月曜授業を実施			
卒 業 式 学 位 授 与 式（9月）	9月25日（土）		9月25日（土）	
創 立 記 念 日	10月4日（月）			休校
編 入 学 試 験（2年次・3年次）	10月16日（土）			
学 部 祭（桜 泉 祭）	10月30日（土）～11月1日（月）			
オープンキャンパスⅤ	10月31日（日）			
指 定 校 制 推 薦 入 学 試 験	11月14日（日）			
体 育 推 薦 入 学 試 験	11月14日（日）			
校 友 子 女 入 学 試 験	11月14日（日）			
付属高等学校等入学試験（付属推薦B方式）	11月20日（土）			
博 士 論 文 提 出 期 日			11月25日（木）	
学 術 講 演 会	12月4日（土）			
公 募 制 推 薦 入 学 試 験	12月11日（土）			
付属高等学校等入学試験（付属推薦A方式）	12月18日（土）			
冬 季 休 業	12月27日（月）～1月8日（土）			
後 期 授 業 終 了	1月18日（火）		1月31日（月）	
補 講	1月14日（木）及び土曜日に適時実施			
大学入試センター試験（C方式）	1月15日（土）・16日（日）			
後 期 試 験	1月19日（水）～1月31日（月）			
修 士 論 文 概 要（初 稿）提 出 期 日			1月27日（木）	
入 学 試 験	A 1 方 式	2月1日（火）		
	A 2 方 式	2月9日（水）		
	A 3 方 式	2月19日（土）		
追 試 験	2月14日（月）・15日（火）			
修 士 論 文 提 出 期 日			2月21日（月）	
大 学 院 入 学 試 験（第2期）			3月5日（土）	
転 科 試 験（2年次）	3月上旬			
卒 業 式・学 位 授 与 式	3月25日（水）		3月25日（水）	日本武道館

会計課からの お知らせ

授業料その他の学費は期日までに指定の振込用紙を使用のうえ、下記期日までに納入してください。

前期分＝4月末日

後期分＝9月末日

学費等の相談及び
教育ローンを
利用される方は
会計課窓口まで。

個人情報の取扱い告知文

日本大学生産工学部

入学手続時及び在学中に収集する学生本人及び保証人の氏名、住所、生年月日及びその他の個人情報は、学籍・成績管理、教育、学生生活支援、学費の案内、図書館利用、就職支援等及びこれらの業務に付随する学生及び保証人への連絡・通知・掲示等、本大学の教育事業に必要な範囲で利用します。

また、これらの業務の一部を業者に委託する場合があります。この場合、当該業務の委託を受けた業者は、上記利用目的の達成に必要な範囲を超えて個人情報を利用することはありません。

なお、本大学では、学生への教育・指導をより適切に行うため、保証人に対して学生の学業成績及び出席状況等の開示並びに履修状況等についての相談を行う場合があります。

（問合せ先） 生産工学部教務課・学生課

History of CIT



竣工から33年。1号館は当初より生産工の管理・運営および教育にかかわる諸業務全般の遂行の事務局として使用されています。この間、事務の管理体制もコンピューターの導入、通信インフラの整備等と、社会変化に対応した設備の拡充が図られてきました。庶務課、教務課、会計課、学生課、管財課、会議室等の多岐にわたる各種事務処理をはじめ、学部運営の中核を担って、これからも実務とサービスの両面から生産工を支える砦です。



概要

名称：日本大学生産工学部津田沼校舎 1号館
階数：地下1階付4階建
建築面積：3,221.08m²
竣工：昭和52年5月21日

スプリング

SPRING No.95

(日本大学生産工学部だより)

平成22年8月4日発行

編集・発行 日本大学生産工学部 広報委員会

本誌に関する照会その他は下記へお願いします。

〒275-8575 千葉県習志野市泉町 1-2-1 日本大学生産工学部 庶務課

電話 047-474-2201 FAX 047-479-2432

E-mail: cit.shomu@nihon-u.ac.jp

www:cit.nihon-u.ac.jp